江戸氣質浪花梅

へ遠13
3065
2 上

遠へ
465
2

江戸堅木浪華梅　巻之下

梅暮里　谷峩　著

題四　思不言恋

哥よりでうとかりひい胸よさわげども。あらわさせん言のそもつ。爰ゑ大坂上本町とゝる所ゑ冨田屋徳右エ門とゝふ飛脚屋あり。身代有徳にて。男女子くつゝひ。何不足なけれど。缺るゝハ。秘蔵娘お千代去年の春よりふと病つき。ろく医療をつくせども。其

奇特なる。さてかもせぐれど。只がうくと煩ひ
けるを。へ嚴早年ごろなるべ聟をもとめてゆくべ。まこと
愈るともあらんと人くよ咄しけるべ。身代といひ娘
千代の器量。ふうとてといひそこら中ようく云ふあて。
似合相応の縁もあるべ。おちよのひ笑せぶのやくと
一回承引せぶ。お千代が乳母そうぞくとおひしが。
ある時コレ娘さま。おさんさまの御病気を。お二人の親御
さまぐ。大てへのかあんじ。お年ごろあるるまべ

と。お聟さまの御せんさく。殊よお聟をあてよひ所合
ふびくの御縁談へ。おさんさまのうしまると。唯
ゆくとぐう。其あげくあ嬢とうてあんしさせ。お
二人さまへ大てへの御不孝のとでぐうませね。女子の
るひうひてもぐうませねべ。ゆくお心のうちよ慕み
お方でもあるるべ。おさんさまをお育のうしたこの乳
母よんの遠慮さぐう。うませね。うちあけてあうしう
ぐう。どうう仕ものうませうと。のくまて千代

心目みのつまるぞ　ちよ　乳母そのやうみぬんぐてくまるへ
嬉しひがたくん心みあるくのかたがあることて。女の身ぞ
みんとみるふそくて其やうる夏もるくえる通りの病
身るまへ男のつるいかりひもくぞやくぐろう
よ妹へ聟をとろうくふ尼よるくふ願ひ。ろ　ソリヤ
かまへまるひ仕不筒。くまくも若ひとくふ其やるみ
相談ぐあるとやなの。御祝言ぐをくまると。耻くく
ひもたんく薄らぐ。うらとけてのくるくあひつふ

か子さまでも出来まくると。今のかりひくどくやふ
てひか乐このるでへぐろうませね　ち　乳母やめうく
そんなと哀もいや。るくぐ云てもくりやんみ。尼よるう
ふと涙ユくるまべ。乳母もまくるぐよ時をうせく
ぐ。ろひ直くてたりまるくく　ろ　コレか娘さまは病気よ
さるるるくねぐ。去年のるかるさまくか従京の
源十郎さま男のうといひ殿明みて。役者でりへば江戸
登くその半四郎ぐ白井権八あんなかたても。聟よとる

か気さぞうませねうといんど。あるんも位だろう【ゑ】コレく
を返事をするれねぞ。よひ年をした身でさんもまさ
うよ好きあるるめの。似合の縁であるるぐる。結びとぐねね
神くハ。正直とのこかめひしまよ。出雲の國の市相談由形
のるるね依怙ひいきかまんさまも此方で推量のとるる
でもあるるハけれど。先へもとぐるねたかりひ。あるるさだろうが
殿でもぐるうまをまひ。余ってくるあるべをみと。脊
中さをれべ【ゑ】コレうぞ。るるるさるるひるんな病ようるるさ

までが其まるる気。そんな心さるるくるひ恥てるるを
るるる恥しい。モウいるてるさるんなと。云あるとさんも塞ぐさ
るを。其のちハ何もいるぞるて。奉三味線もひるを。
物見遊山のるるるく。吾部屋へ入て戯書をるる。
哥を誦るを。その暇みハ珠数をつまぐる。念仏ハ餘
念なければ。年若さめくるるるるるるるかりひつ日を
かくるるを。斯て花形原十郎を一まづ叔父徳右エ門
るるへ落ろうんと。此所へ来て對面るるを。徳右エ門も心

みおくりて幼女あて逢しゆゑ。たゞ〳〵互ひ音信も
なくつゝ〳〵ゞ。去年の春名字をもつゝまして。吹聽
なゞ〳〵来て。久しくして對面。その時の言葉みもやうと
いろあんうといひ別れしゝゞ今来しゝハ何ぞ不首尾の筋
みてもありてのゆやころうとと向けまへ。源十郎ハ
泣くも委細の始末をあゝまゝ語まへ。徳右エ門夫
婦も気のどくとかゝんども。いひて詮なゝとカをつけて
徳右エ門 その方も知るとろう。親の家々死絶るまへ親の

元割なるかまとれば。何も心置となく。いつまでも此所に
落つゝ詮ゝなせば。商賣ゞゝといひ。諸國へ通路もあれ
ば。尋ねるよ便りもよろうんと懇ゝいひけまへ。源十郎も
さそうゝ血筋のへと。心よろこび此処に足をとゝめける。
娘千代ゝ〳〵のどろゝ。疾ひも少し快きゝよ
えもまへ。両親のよろこび。乳母もいさゝて。おちよろう
源十郎ゞゝ行くまとゝ。影よろう日向よろうよく世
話をるゝよ隨ひても。お千代ゞ心をあゝろう。
乳母

情愛の変はらぬ赤縄を結んと
乞ふ

まてば甘露の日和となる。先さまの禍々此方のさいわい。此うぶぎが気のどひい。源十郎さまがお出なされてよう。おまんさまのお顔つきもよくなることゝがおやんさまよりうろう。お世話をのこして上やそれべさも嫉気なごやう子。ナントおまんさま自身よお世話なされる。お気色晴身をかたるゝなされる。自然とお病気のかたわも宜ふごさうやせふ。お部屋みどろうお出なされぬと。あらゝのおさゝれへもおいでなさうやゝ

ア、モ乳母

とゝたとが。なんぞ身内のお方じやとて。此やうな髪も繕わぬで仕まひもせぬ。アノうづゝひどうお側へ移るめのうば

おまんさまはそんなようちでのお気ざうゝ。お病気も起るといふのア、困さあのごと。當惑の口へさゝゝゝ生さもど思ひいぞろ心の恋どうう仕振もあゝんぞと。神気をもむ乳母ごう。ア、不義とふ訳でなゝ。いろそと起をうろえて引とゞめ

ア

もるのといふて結るとゝこゝや死ねわどまさうろうて

いやと呉くもいひて。心よつくひ憂おめひ。徳右エ門夫婦
を別間へ原十郎を招き 徳 扨この度の大変四人主従
散くだらくとるまべ。一日も寧き心なるやうと。
二人も日くゑ察それど。知つてのとろう。女子ぞろふて。
跡を襲るべき男子るけまべ。何ぞ養子とおめんども。
いろるせへるや。所くより言込あつて。似合きめのも
あまども。妹へ聟をと姉の千代。言ても承引せ
ぞ。又ちと沢あまべ姉ゑ此家を襲をく。親の口ら

此やうみとをいひ。甘ひのともさげをちんが。其方を
養子ゑまるるべ。得心もるやうみ。うそく話
とるや。子ゆへの間うれるみども。一図ゑ欲さそちが
身のうへ。得心さんしてくるまるる。現在従子のそちと
いひいよくたく家繁昌死ねる娘の病ひも愈飛脚屋
のとるまべ。諸國へ便も自由自在詮ぎの蔓のもうる
んといふのも聟ゑ去れゆへ。手ゑ勝手もあるべきぞ。
のつまるへ。娘の恋人命を助けてやりくるこ。コレ従父

が手をさげて頼みますぞ。コリヤ婆もこのやうにと言葉を
つくし理をすゝむ。倶くみなげく従父従母の恩愛と
さそれはさりければ。源十郎はぞんくの義理と恩とに
からめられ。何と回答もうちふせしが。良ありて顔を
あげ 源十 一トかたまりね。私の身のうへ。とくと今ぞん勘
弁なし。明朝までにお返事をと。不興ながらも別る

題五 被厭恋

歌にいふ人の思はんさもいとはかし。吾むくひぞとせめ

てあらせん。徳右エ門は夜の明るを待かね。源十郎が寐処
みゆきしが。源十郎はみえずして床の上に一書ありしを
あけてみれば。二人の恩を忘却しつるにもなく。娘千代を
嫌ひたるにもあらねども。出ぞんしの身のうへ主人を
ひるかへしたることもなく。せめて見おくるまで飽までに
食し暖に着るゝの恐あれば。己をすてゝ養子になし
下されしその恩を。おん報を申上は。再會の折もあらば。
其時あるべく。かん佗住ゐべし。かん怒のほど。宥免を

わざと細く出のこゝろを考へ。娘ちよのをも
ひやゝ見。ハツト屋居に坐ぞその物音み家内そうろう。
うつけ又見べ。徳右エ門を伏ぐゝ。その出置を見て
恨を。出置をうげてい位圖定めてその方も最の節も
あゝんぐ。又お見ぐ方ある。大夏の娘の命みもかゝる所。
夏をうけ言ねとやでいみての頼を受うけねいどう怒
ぞ。義理も法もあゝれ奴とうゝかこうゝ男位始終
を笑て娘の千代。ワツトぐろうみ位伏ゝぐ良あつて顔を

あげ。図ひよんみゝこゝゝぐ心うゝ。お二人さまのお怒を
や。お歎をゝをさせやるのも元のおうへ私ぐ罪あゝたし
とかゝみわど猶ゝゝよのこゝひを傳ふ明ゝ見よゝく
月もゝと泪川恋ゝぐる身のゝゝを見せゝぐゝの
と思ひゝもゝゝ人よゝ見。お二人さまに苦労ゝける恥
ゝゝぐゝ道ゝゝね不義あゝゝよのもせめて身の懺
悔ゝゝもせね去年の春弥生の仲の五日の日初よ逢
ゝぐ恋慕のゝゝぐゝ。世ゝも稀ゝゝお方ぞとおもんぐ

うんぬんとして。余所の殿御を行あうせんと。かりひうを
せびうをそわど。日々弥々焦を身の。鳴ねわるるの
ちゝなさん。女の方より大膳ゆ。そをそゝな者とかゆんまで
と。慎もつけ吾ゆゝ。羞ゝゆまども中々よ思ひ上ねを
抑へつけ。かさんつけゝゝ病ひとうつ。そをもへよか二人さま
あゝめるか加持や祈禱や。子もへの間の朝まつり。神へ
誓ひ仏へ願ふそのか心の有難さ。そゝ怒ゝかりふまつけ。
かゆひ切らんと幾度ゝ矯直せどもうとゝね心ゆんの因

果なその身のゝん。去ゆゝゝゝ死よ去ねるとも。慕ふ心を
ゝゝせゝとかゆひゝゝ。ゆ不便あまり顕ゆよ恋慕をあせ
ゝゆへ。そゝゝてさげそを嫌いる。其愧ゝゝん今とうう。
か情ゆんゝてか二人さま。情ゆるゆゆて下さうゝゝた早
此ゝゝい思ひ切ことゝゝふそのあゝ。不孝の罪いか免ゝ
ぞそ。黒髪半切捨てゝゝ入る心ぞ表ゝう

題六　羈中衣

哥ゆ彼のゝん草の枕をゝう寐ゝて。うん旅衣袖ぞうちね。

雑談を
主婦
行末
物科

花形源十郎ハ叔父の家を立出ぶ。諸国の船着く
を詮義まれども一向手がゝりもなく。素より乏しの
貯へなれば。路用も尽き衣服も一つゝやぶれ。又刀をも
脇ざしを払へば。やうゝ露命を繋ぐやうでゝ今ハ非人と
なりて。身ゝ荒をまとひ。愧も恥辱も忠義もへと。大坂へ立
戻る。橋の下を住家として。日ゝ三度夜ゝ三度川水ゝ
體を凝し。神を祈る仏を拜し。たゞるものハ神仏乃
力なれ所くゝと尋ゝ歩くゝうちゝ。難波新地ハ賑く
見世ゝの構沢ある所なれば。何そ手ごゝろを突出しも
なんゝと心をつけ。人のうゝゝ耳をそばだて居る
ゝ講師もゝゝと休をとゝまれば。ゝくゝもわるゝひそ
定連者大勢あつまり。いろくの世間ばなしをする中
ゝ。外の構ゝゝの噂。咄家の評判諸國の名物名
産を論ずるゝ。うねくゝ東都へ下りて案内くゝ
き草袋屋 九平 どゝがゝゝと云ても東都へ繁昌の地ゝ
て。何とゝるゝき中ゝも。蕎麥鮒鰻鱔會席の料理

茶屋を格別ちがふるゆゑじゃ。東都を叶つねるひの図それ
でも酒へこそ〳〵元じゃ丸されば酒も本堵白へ大坂へハ
ちらで。直ゑ東都へ積下そとる。素より堵白とハ
多くちがめ。皆片白さる。酒も東都のわらがゑと東へ
度く往来する者ハ国へ廻つてやもらが人情なり。皆く
心ゑあるゆゑ図入かゑ住居する所をあるゆゑの東だろうわか
てじゃが。此度新町の突出の大夫を五貫ぢゃ丸ちんこの図
夫をちゃんせあるを知ねるまつ込で。何も止さんせと角ゑ立

図イヤ其話を此頃一寸咲まゝ。扨美しひさゝみござ
アまをそな図入美しひゑんのとりこちやるひ。年ハ二八位り
ゑんゑるゆ十七八。小町衣通もるゆく及ぶまひとをゑゝか。
そゝて其小町ゑ似と呼があるゝて。どのやゝゑ容でも赤
ゑ入とをゆるひとのゑゑ。却てそをゑゑへゑ大尽ゑちが。君
もく口説かとさんとをゆゑ流行ゑ。ゆるゑゑ容易ゑ見ゝ
ゆゝるゆゑじゃるひ図いづをゆゑゝそんゑ石化が出ゝゝゑゑ
図入ゑゝゑ播州浪人の娘とやゝそをを堂嶌の俄分限

堺屋太郎左門とのゝる者ゞ。賣ことのゝる。それをつねく
評判もいろ〳〵ある人々へ。悪ひ変とのゝことあの人よ授ぎゞ。
どうもさうとも思つまねゞが。何ん〳〵でも上本町飛脚屋
の評判娘よ生うつ〳〵で。一ぜん仇手々へ勝まく
ゝえゝる

定連皆〻

そうやアせわて見るだろうゆ眼のくそろと。
委細のそる〳〵を源十郎。段簀の外よ笑とゞわ心の中よ
能手ゞ〳〵と。勇そのおゆひ荒引ゞうゞいそゞゆく

題七　手枕時雨

哥よ扱間よう時雨を月よりうくく。幾度さそふ手枕
の夢此姿をそへ新町へ入ても遠目よるのそ。それをうハ
と源十郎を堂島のあうをトあうまゝくと市中を数
を人通まて。堺屋のうらを覗込くそれども通まとる
そうそへ内のゆうを一向ちまで。如何いせんと当惑な
そ扨〳〵非田院引ゆるのうを通まうまて。源十郎がゆうを
をえて水影へ連行とうく此町を多く通るゆうまう。
物ゆ〳〵ひの支るまゝ。それを咎るよへあうまどそちの

骨柄をそろへ空〳〵荒をうぶ。さまやう者ども之さる
やうなナンド此町内の番子の夜ぞんは非人一人ゝ老人よて此節
大病ゐへ代りの入時そち其ゝうとうて夜番をす。
夜明て町内跡先の番子二人よて。掃除す〳〵水をうち
仕まへ。昼のうちハ一人さへのこ〳〵べ。やう〳〵合ひづまへやく
とも勝手次第。最給金ハ手桶さげて門へさち。一軒
より一椀〳〵の飯をもらひ。そをを身の方へ持参あまべ。
よれよ賣代ゐ〳〵。銭よこ〳〵やうゐう。得心あべ股引布

子ゝ早速ゐ〳〵ひやうべ〳〵とさもうゐへ心のうちゐ願ひ
ともるさ共ひ。ゐをとゐも神仏のか引合せとさ〳〵く承
引して此町の番子とハるうゐ。ゐや二月三月つとやるうち
みもとく〳〵堺屋へ心あまべ此所へ立入麦く素より賤し
うゐね風俗ゐて。非人みそやう〳〵しき者と。堺屋の店
の者もいさうゐハそろ。四方山のゐゐ〳〵のうちよ

源十 私もゐゐ三月あやうゐも。此町内のか世話よゐう。どこ
の旦那さまよゐも存じて居ゐまをが。爰の旦那さまよ

かさまくてハ。終ハえさしくと支めごごろませねば。
やハ病気でもござりやさそうと問へば 店番者 そのおく
奥出入の者ども番頭ごろうるまべ。我ハくと且那の良を
ちゝねくかと。笑て尚さうがてんめうぞかめくども兼
忍ぶるもうづく。如何ゝせんとかめわ。
より女中立出明日ゝろものとり。住吉へ仇系詣れ
ハ。ぱくくろもの駕籠の人をゝてやまと。且那さまの
ひつけと。源十郎ゝ笑つくると。我念願も成就の時

と天へも登る心地して。翌の朝をと待居る

題八　叢社月

歌よ水の面より影うつる月ハ神の鳥居のうへ
て淋しく。源十郎心いさゝ夜の目もあつぞ。夜番を仕廻
夜もゝくもちろ。掃除もろうも丁寧ハ水も
うちくしひ。今ハくと待居る駕の者の内へ入ると
えまべ二重暖簾ハてえぞ。コリヤ住吉へ先へめうんと元
の通ま荒をまくひ。破ま手拭ハ面をうくく。ハ場所

を見まして臥しをるよ。堺屋太郎左エ門が駕左右より手
代つきて来つる。そぞと寐る爪情より荒のあるぞう透
見して待居る。太郎左エ門らしもの通つる。ようより下
乗被なのるぞ。さて鳥居際よりすぐて頭巾をとり
んとせしが付かりひけん。頭巾のまく永くと拝をする
元のごとく駕よりて帰つる。原十郎起上つてわと
見かくる正しく姿を似たるもくんぐんの顔を見ざ
まび捨うるかりひ是非なきるもと十方ようまを力を

かとして其所へかくる時枕辺よて誰とのる定めもなく。
元ようと北をさして行べ途中よるぞ助るものんん
切く疑ふべうぞとかくとかんべ夢さめてあうを
見まる〜 源十 とる所なき夢のつげ。何ぞ太郎左
エ門がの容体をいうるく急ぎ乳〜ぐくさるる
ようを目を費さんより。此ごる乳姿よて對面をるぞ
とも。曲輪へ入て実否を乳さんとかんど。神を力の身さ
いうるものんうとあそる乳北をさしてゆく

義男雪中よ
貞女と再會せ

題九　常盤木の雪

哥よみ埋まてつまるまさ松も雪よあわれひるもてまさ
折やせん。徳右エ門　娘千代々煩悩の紐まろとわよ〻〻
緑の黒髪を半々きれど切るわる日みくまさる恋の間。
あへの安部野の庵よ出養生。ぐ〻〻人の姿僧をうけてみぐさ
わびきなとつくへ払ふ涙の露。玉〻〻ぐ〻ぐ操珠数と。
とめよ唱る仏の御名口さへ氷ろへくと降つのる夜
の雪灯をそ一べ風あうて。透間をいとふ病ふの身

此よりうよあるエヨみあるこれどう〻〻てか出るまるる〻〻さぐ
皿難　我であ〻〻ぐ〻ぐ。ひまろ〻〻て又塞ぐを側ろうば
ど気を引るて　おまへさまのやう〻よか気の弱ひるのい
ぐ〻うませね。生てさへか出るまるとも〻思ふ念力通ふ
らねとふをいぐ〻うませね。アレ〻〻とまぐ〻〻うまて
まんぐ気味のうろひ　そまでもアノ音をか笑なれ
まう〻ぐ〻と振ふかとちよ　ホンニのふ犬の狐の　ちろ
とえてまのうませくふと。手燭をつけて立て見まぐ。

〻く非人そと。すさうよ乳母もかどうけど。心をくづめ側へ
より[ゑび]此大雪ゆゑぞ〻〻難儀。粥でもくべる気はない
うこゝへどそんも絶入う〻〻。此人ゝ雪ゆへの病ひゆへ
よの菜ゞあるとゝろてうへ〻手早く菜をあてゆまども。
そや息もそんくあり。不便のうゆよ頭。さこそ貞そびつ
う〻[ゑび]たゝうよあるとい原十郎さまとゝふ名よ。かちよも
思ひぞ飛出〻。荒とも雪をそゝひをそ。うよつさ二人が
〻くと抱ひげて内へ入ま菜をゆまども歯をそひわ

[ゑ]コレうべどうも仕ゝいうひをうどうぞ〻て上ゆ〻
てと。ゆよう乳母ゞさそ〻の療治。かちよゞ帯を引
わどけば[ゑ]コレ乳母何を〻ゆ[ゑ]ゆよをとゝふさを
ゞ冷うゆへの門病気ゆまべ。人の肌をそあ〻わるゞれ
よ上うそうゆ〻。願ふてもうひさひうわ。あるうさの[ゑ]
そまでもどゝもそんゆこゞうあうこまだうう〻へ
[ゑ]お羨う〻ひも時ようゆ。たゝ人他人のかうさでも。助か
ゞ仏の道ア〻ゞまう〻ふと。手をとりて無理よそ〻ゆる

肌ごとぞあく〜すう〜ちうしやゝ忽息をみさうして。
其うまし〜さを思ふぞも。ぐづうしき支うちうをを業
をとうて口うう〜 図 源十郎 さまいのゝ 図 源十郎さま
イのゝと呼久さまて目をさまし〜。あうううく見まい
して 源十 安部野の庵とかめひしげさてい叔父ぢの内
るう 図 ちうをうゝ安部野の庵。ちよさまの養生
場 源十 面目もうきを支ゐて。厚きお世話のうとゞけるさ。
重ねてお礼と行んとする裾をひうへ。うゝめしげゝ顔

うち守ゝ 図 貞うるとうさくいもうゝおお止めいう
そまひ儒ね先ゝて露をあいとゝ入ゝうゝさゞさとう
れゞと包めどゝまていうう。爺さんや母さんのお耳へ
入てのお情が。身ゝあまうてのゆとうぐまてうそ死ん
ざう〜。此ゝげきへあうまひゝ羞うしひる笑せまゞ消へ
うゝ思ひの芝までを雪へゝてゝ年月ゝかりひ切ゝを
あうせんと待うひあうて嬉〜ゝけんあまを見て
下さうま〜。おまゝ似ゝうゝ浮世繪をアレわのう

ようけどよて。明くるまで間の浮むこねかゝひ切らまね
心あもかゝひ切さと其燈拵よ。此黒髪をかゝてこしゝ
さび。憎〳〵と思ふ心あもせうそうゝやつ徒気そとゝ石め
らゝとめゝんゝとそまを乐を表ぶゝゝゝさかゝゝろ
せゝゝ上ゝゝハモフ付もゝゝへかゝこゝきあん身のまま
落ぶまこ所艱難も忠義ゝへかゝこゝきあん身のまま
と小簟笥の引出〳〵より小判十両とり出〳〵ゝへあん
より少みけまどゝまて身ゝをゝゝらへてのゝゝを

路用ようゝゝれ心主人のなん行衛かさぶ〳〵ゝゝれて下ゝゝ
ゝ〳〵。又も路用うゝゝゝゝゝゝでも取ようゝでゝゝゝゝ
う都合をゝゝゝ〳〵ゝゝゝそれも逢のうかゝやゝゝ〳〵ちゝと
一筆出てかゝ〳〵て下ゝゝゝゝと段〳〵の深切よ痛ゝ入
ゝゝゝそまて源十ゝゝ孫〳〵のお情ゝゝゝゝ水竹よあゝ
ゝまび左ゝまでも慕ふ心根をゝんの憎ふかめひま〳〵ゝ嫌
ふとゝゝゝ思ひつめての恨ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とも。我身で今ハ共ゝのゝゝゝ。此世の人とおもひびゝ。

堪忍して下されとうち萎るる身が乳母も側うろうろ
なさ【うば】なるわど其姿はでは落ぶきうされ海山なれば苦
労あるべ。恋ちゝねのも市無理とかめひきせねどさう
なるべ。かはいさまは雪よりべて死るしやつさをわのお子が
肌でゝめ【ちよ】コレ〳〵乳母そんるとゆみていやよと袖を
引口を塞ぐをゆう松ひ【うば】ハテいそれるれもまはせね。
そそくお置さすぐそのうへよろ〳〵よお菜をあげ
なされ〳〵ゆう蘇生〳〵あるこのちん身。万端めでゝく

おさまる後さゝめてあるさもあわ〳〵名がこさうませう
と。透さね乳母がさめ呼【源十】何とも今ハ云ねとそれ
さその時ゝぐるの無夏かうだやでゞやさゝき言葉が
心ざゝの此金子ゝるも受納つるゝん。さゝめて
と厚く謝〳〵。うゝゆるぐよえかゝる間。さぐゝの雪
解を。立ゝる見てで出て行く

題十　花下忘帰

歌よかのゝどち情汲ゝうゝを忘きてゝゝそゝるの

木のもとにちよぐ情よりて。源十郎そ身のまりを
とりこらへ今そえるるぞ。えの姿よ立そり主人
の実否をぐさんと日く新町へ入九軒の揚屋の方
よ人めをと群集るへ。大夫の揚屋入るんとやきえ
るよ果して美人お後を乱さぞ揚屋をそるぐ
此花太夫とやい突出しのその日より。か客の絶間るき
とりよ噂。その癖お客をあるりもてんりて。床よ
入ねとりよ抔判ばどんな代物ぞてこまそと。

毎日くよどもとんとえねじやかさんぐこへそじやう
ぐこもとねくとりよ中より。アレ住半より出るが
此花太夫とそくよりも。これもくと先へもむそうそう
るうち井筒屋へそる。源十郎ハやつと後ゝげとそて。
正くく主人の娘お八重どのよ相違あるまくくと呼び。
くくく井筒屋へもき。此花太夫があき日を約束ー
りける

江戸堅木浪華梅巻之下畢

江都質氣浪花梅後編

追〻功能あらはれ口授毒虫の中にん
彫刻者急キ迫〻賣出しにん

梅暮里谷峩著　近刻

家秘神藥　蛇頂石　功能

豐後高松　後藤氏製

一毒蚧　蝮蛇　病犬　蜂　蜈蚣　班蝥　青蜘　毒蛇　狼　蛞蝓　野干　狸　ヤモリ　タニコ
その外一切毒虫毒獸の咬付刺さるに此石を疵にへあて墨又ハ熱湯にてとろ掛ハ
石吸付て毒氣を不殘吸取忽平愈もる事必神勿論奠茶膏茶用ゆるに不及古今
重宝〻茶石〻香茶ハ外紙出ふあり

茶石○大六匁○中二匁○小壹匁五ト

賣弘所

京都姉小路　鳩居堂久右衛門　大坂北久宝寺町　河内屋久兵衛
江戸芝神明前　鶴屋清兵衛　名古屋中市場町　美濃屋市兵衛
同人形甲通　鶴屋金助　同傳馬町三丁目　美濃屋清七

其外諸国取次所有之に功能ひろめのため毒虫ひろめ

編者　梅暮里谷峩

畫工　溪齋英泉

文政五稔壬午初春新刻

名古屋中市場甲　美濃屋市兵衛
江戸人形甲通り　鶴屋金助
日本橋砥石店　大坂屋茂吉

書肆